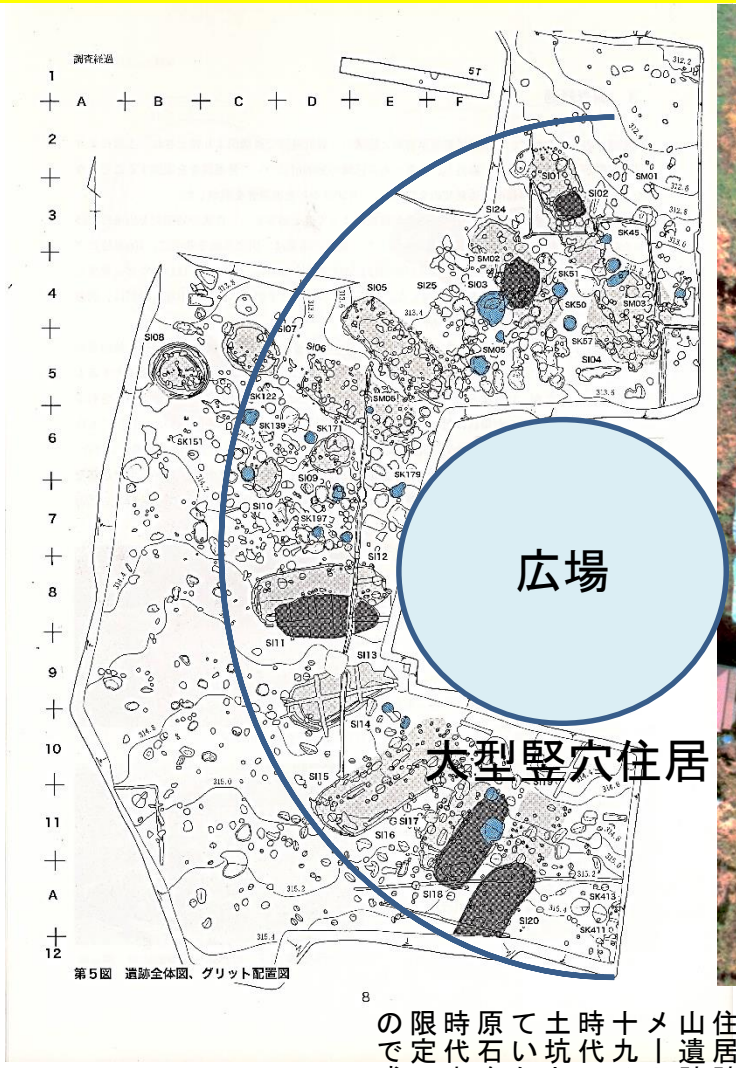
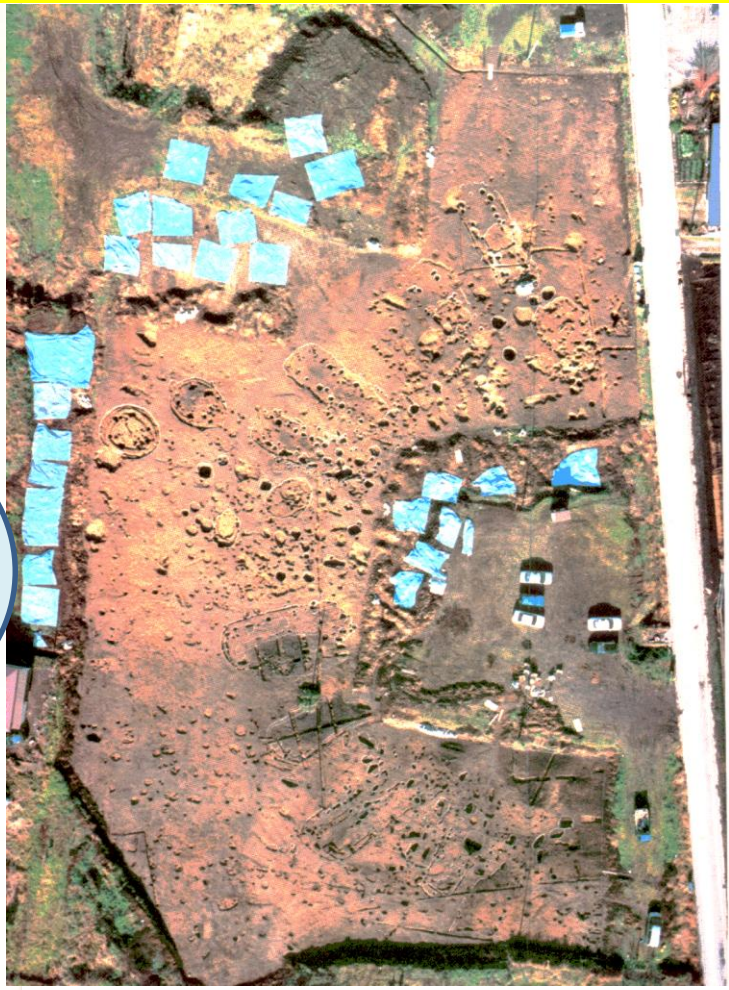
4500年前、縄文時代中期、都市計画された遺跡　会津若松市大戸町本能原

大豆田の本能原遺跡



第５図　遺跡全体図、グリット配置図



大戸町大豆田（まめた）の本能原遺跡

県内最大級の縄文時代のムラ「本能原遺跡」

（会津若松市大戸町）

会津地方は、旧石器時代から継続して生活していた跡の遺跡がたくさんあります。

会津若松市大戸町大豆田の「本能原（ほんのうはら）遺跡」は、平成十一年（一九九九）にほ場整備に伴い発掘調査された遺跡です。約四五〇〇年前の縄文時代中期の遺跡で、直径約六十五メートルの広場を中心に、長さ約二〇メートルの大型（おおがた）竪穴（たてあな）住居跡（じゅうきょあと）二十七棟が輪になって囲む環状（かんじょう）集落（しゅうらく）です。

建物跡の大きさは青森県三内丸山遺跡よりやや小さいものの、県内最大のものです。

広場の周囲には、たくさんの穴がありますが、それは、大型竪穴住居跡や円形竪穴、柱穴や土坑、墓です。広場を中心に楕円形をした竪穴住居が、広場を取り囲んで放射状に並んでいることがよく分かると思います。竪穴住居は、大型長方形竪穴住居跡と呼ばれるもので、この遺跡では、三内丸山遺跡よりやや小型の住居でですが、最大二十二メートルあり、最小でも十五メートルあり、平均十九メートルあるようです。福島県内最大の縄文時代の住居跡です。やや大きな穴は、フラスコ状土坑と呼ぶ、どんぐりやクリなどの木の実を入れていた貯蔵庫です。小さな穴は、土坑墓と呼ぶ川原石を乗せた墓になります。遺跡の年代は、縄文時代中期、大木７ｂから８ａ、８ｂ段階の土器が限定して出土しています。あまりにも貴重だったので盛土し保存してあります。

青森県三内丸山遺跡や宇都宮聖山遺跡の大型竪穴住居跡と同じで、長さ20メートルありました。